



教員公募	919
平成11年度宇宙環境利用に関する地上研究公募のご案内	921
「第40回科学技術映像祭」学術研究部門参加作品募集	929

編集後記：「天気」の創刊号（1954年）には論文は載っていませんでした。代わりに「報文」というのがあって、気象の最前線から寄せられる話題などが紹介されていました。当時は「気象集誌」が気象学会の論文誌の役目を一手に引き受けていて、日本語の論文もたくさん（全体の半分程度）載っていました。

「天気」に論文が載ったのは第3巻（1956年）からです。その際には、論文を設ける意図がこう書かれています。「学会の機関誌として、今後はより高い内容のものを取り上げ、また分野もより広いものにしたいと考えております。しかしこれは決してアカデミックなものにしようとの考えではありませんから、いままでのように身近な論文も、どしどし御投稿くださるようお願いいたします」。ここに、当時の「天気」の性格が端的に表れていると言えるでしょう。

その後、研究の中心が気象業務の現場から研究機関

へと移り、会員が多くの分野へ広がるにつれ、「天気」は研究者間の成果発表や情報交換の場としての役割を増し、掲載される論文は研究論文の性格が濃くなっていきました。こうした変化に対応し、1997年からは論文等に英文要旨をつけられるようになりました。このほど研究機関の会員による論文・短報から掲載料を頂くことになった（879ページ参照）のも、上記の傾向を考慮した上で決まったものです。

しかし、これらの改定によって、研究を本務としない人の投稿が先細ってほしくはありません。現在の「天気」には論文誌と情報誌との2つの性格があり、そのどちらもが大事です。気象の最前線から研究者への情報提供とともに、研究成果を還元することもまた、「天気」の重要な役割です。「天気」がその役目を十分に発揮できるよう、会員の皆様の協力をお願い致します。

（藤部文昭）